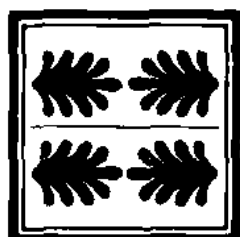


月の光

井上 靖

講談社文庫
A21



講談社文庫

月の光

井上 靖

昭和46年7月1日第1刷発行

昭和46年8月20日第4刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社国宝社

© Yasushi Inoue 1971

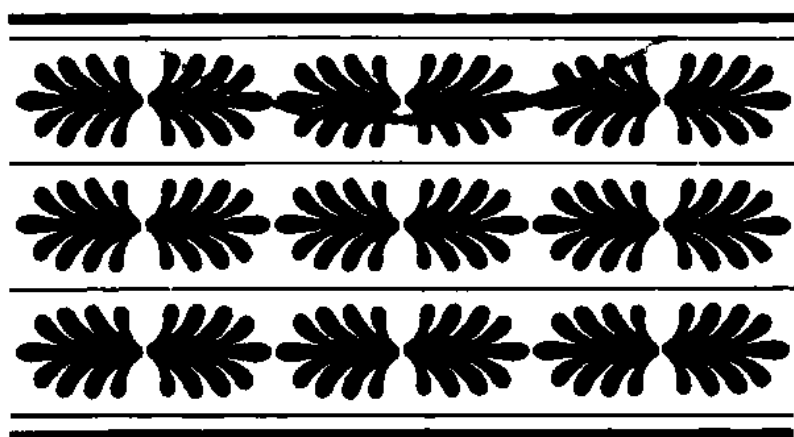
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

月の光

井上 靖



目次

花の下

月の光

墓地とえび芋

解説

年譜

中村光夫

七

四七

一〇九

一三六

二三四

花
の
下

一

父は五年前に八十一歳で亡くなった。軍医少将に昇進すると同時に退官して郷里伊豆へ引込んだのが四十八歳の時であつた。それ以後三十余年間、背戸せとの小さい畑を耕して、母と二人で食べる野菜を作ることを仕事として過した。陸軍を退いた時は開業する気があれば幾らでもできる年齢であつたが、そうした気持は全く持ち合わせていなかった。太平洋戦争にはいると、次々に軍関係の病院や療養所ができて、軍医不足の折柄その院長にという声も何回かかかったが、父は老いたことを理由に招きに応じなかつた。一度脱いだ軍服をもう一度着る気持にはなれないようであつた。恩給を貰っているのですし、食べるに事欠くことはなかつたが、物資には窮屈な時代でもあり、病院にでも関係していれば漸く暗く貧しげな雰囲気を漂わせ始めていた父と母の二人の生活はまるで違ったものになる筈であつた。経済的な余裕が生ずる許りでなく、いろいろな人にも接し、老人二人の生活にも生きて行く上の張りができるのでないかと思われた。

軍関係の病院から口がかかつて来たことを母の手紙で知った時、私は真剣にそれを勧めるつも

りで帰郷したことがあったが、結局は口にしないで帰った。補綴^{つぎ}の当った野良着を着て、六十代にはいつてから急に痩せの目立ってきた身体を背戸の畑に運んで行く父の背後姿は、何というかもう社会とはすっかり無縁なものになっていた。この帰郷の折、母の口から聞いたのであるが、父は郷里へ隠棲して以来家の敷地から外へ出たことは算える程しかなく、訪ねて来る村人には不機嫌な顔を見せるようなことはなかったが、自分から他家を訪ねて行くといったことはなかった。一二丁のところに親戚の家が三四軒ちらばっていたが、不幸でもない限りそこへ顔を出すこともなかった。そればかりでなく家の前の道路へ出ることも避けている風だということだった。

父が一種の厭人癖を持っていることは、私も弟妹たちもみんな知っていたが、子供たちが都会へ出てそれぞれの家庭を営んで、両親の生活から遠ざかっている間に、父のそうした性向は老齢になるに従って子供たちの考えている状態よりずっと烈しいものになっていた。

そうした父であるから、子供たちの世話になるというようなことは考えてもみなかったであろうし、また恩給だけで一応口を糊することはできる筈であったが、終戦を境にして時代はすっかり変ってしまった、恩給の停止した時期もあり、それが復活しても、支給される額も違えば、金そのものの価値も変っていた。私は父に毎月何がしかの金を送ったが、それを受け取ることは父にとつては甚だ不本意なことであつたに違ひなかった。少し大袈裟な言い方をすれば死ぬ程厭だつたかも知れないと思うのである。父は一文の無駄遣いもしなかった。余裕ある送金をして、最低の生活費以外は一文も遣わなかった。戦後も畑仕事をし、鶏を飼い、味噌まで造って、副食物

に金をかけることはなかった。それぞれ社会人として一本立ちになっている息子や娘たちは顔を合わせる度に、そうした父親を非難したり、批判したりしたが、父親の生きる姿勢を変えさせることはできなかった。息子や娘たちは両親の晩年を少しでも慰めあるものにしたい気持を持っていたが、金を送っても遣わなかったし、衣類や蒲団などを送っても、勿体ないと思うのか、その多くは仕舞ってしまつて、めつたに使用することはなかった。結局は食べ物でも送る以外仕方がなかった。食べ物も腐敗してしまうので、父もそれを食べ、母にも食べさせないわけにはゆかなかった。

父の八十一年の生涯は清潔であつたと言つていいと思う。人に恩恵も施さなかつた替りに、恨みを買うこともなかつた。三十年の隠棲生活から考えると、汚れたくても汚れようはなかつた。亡くなつたあとの貯金通帳には、自分と母の葬式代として、それに適当と思われる金額が残されてあるだけであつた。父は養子として他家からはいつていたが、自分が受け継いだ家屋敷はそつくりそのまま長男である私に残した。陸軍に勤めている時代を買つた家財道具はその大部分を戦後売ってしまったらしく、目ぼしいものは何一つ残つていなかった。その替り、家に伝わっていた物は、軸ものや床置きのようなものまで何一つ失つていなかった。父は財産を一文も増やしもせず失くしもしなかつたのである。

私は幼時、父や母と離れて祖母の手で育つていた。祖母と言つても血の繋がりはなく、医者をしていた曾祖父の妾であつたぬいという女性であつた。ぬいは曾祖父の歿後、私の家の戸籍には

いり、母の養母という形で分家を立てた。勿論これは曾祖父の遺言に依つてのことで、一生を傍若無人に押し通した曾祖父のいかにもやりそうなことであつた。

従つてこのぬいは戸籍の上では私の祖母であつた。私は幼時この祖母をおぬい祖母と呼び、本家の方の当時まだ生きていた本妻の曾祖母とも、また母の母である本当の祖母とも區別してゐた。曾祖母は「おおばあちゃ」と呼び、祖母はただ「ばあちゃ」と呼んだ。私がおぬい祖母の手で育てられるようになったのには、特にこれと言つた理由はなかつた。当時まだ若かつた母は妹を妊娠した時、人手もなかつたこともあつて、一時期私を郷里のおぬい祖母の許に預けたのであるが、それからずっとそのまま私は幼少時代をおぬい祖母のもとで過すことになったのである。おぬい祖母としては私を手許に置くことに依つて、己が不安定な立場を少しでも固めることにもなつたであらうし、それに孤独な老婆として私への愛情も私を手離し難いものにしてゐたに違ひない。また私は私で、何しろ五六歳の時のことではあるし、祖母に馴なついてしまつた以上、親のもとに帰る氣持を失くしてしまつたことは自然であると言ふほかはない。それからまた両親は両親で、妹の次には弟が生れるといった時期で、それほど嫌がるものならといった氣持で、私を手許とに引き取るのを怠つてしまつたのである。

おぬい祖母が他界したのは私の小学校六年の時で、おぬい祖母が亡くなつてから私は初めて郷里を出て、両親や弟妹で構成されている家庭の中にはいつて行つたのである。そして父の任地の中学へ進んだが、父の転勤に依つて、家族と一緒に生活する期間は一年足らずで断ち切れ、私

は郷里に近い小都市の中学に転じて、その寄宿舍へはいらねばならなかった。中学を出てからの浪人生活一年と、高校の一年間、併せて二カ年家族と一緒に暮したが、この時も亦父またの転勤に邪さまたげられてしまい、それ以後ついに両親や弟妹たちと一緒に生活を持つことはなかった。従って私は父にとっては、一緒に暮すという点では縁の薄い子供であったが、父は私に対して、ずっと膝下において育てた三人の子供たちとみじんも分け隔てすることはなかった。いかなる場合も公平であったし、それも強いてそうするのではなく、手離しておいたから愛が薄いとか、手許で育てたから愛が深いとかいったものではない、父の場合もともと持ち合わせていないもののようなものであった。自分の子供たちと親戚の者たちを並べてみた場合も、同じようなことが言えた。不思議なほど愛情の使い分けといったものは見られなかった。極端に言えば、自分の息子や娘たちも、全く血縁関係のない最近知り合った者たちも、さして区別のないようなところがあった。子供たちにはそうした父親が冷たく見え、第三者には暖く見えた。

父は七十歳の時癌に罹り、一応その手術に成功したが、十年後に再発して半年程床についていて、次第に衰弱して行つた。高齢であつたので手術は見合わせねばならなかった。死は全く時間の問題で、今日か明日かという日が一カ月近くも続いた。息子や娘たちはそれぞれ喪服を郷里の家へ運び、あとは何となく病人の最期を待つような恰好で郷里と東京の間を往復した。私は父の死の前日父を見舞い、未だ四五日は持ちこたえそうだという医者言葉で、その晩東京へ帰つたのであったが、その間に父は息を引き取つた。最後まで父の頭はしっかりしていて、見舞客に出す

食事から、自分の死亡通知に関することまで周囲の者にこまごました注意を与えていた。

父と最後に会った時、私がこれから東京へ帰るが、二三日したらまたやって来るといふ挨拶をすると、父は痩せ細った右手を蒲団のなかから私の方へ差し出して寄越した。これまでにこのようなことをしたことはなかったもので、私は咄嗟の間に、父が何を求めているか判断がつかなかった。私は父の手を自分の手の中に収めた。すると父の手は私の手を握った。二つの手は軽く握り合わされた恰好になったが、次の瞬間、私は自分の手が軽く突き返されたような感じを持った。釣の時、竿の先端にぴくつと来るあのあたりの感じであった。はっとして私は自分の手を父の手からはなした。どう理解していいか判らぬが、併し、確かにそこには父の瞬間の意志というものがこめられてある感じであった。いい気になって、父の手を握り、冗談じゃないよと、つと突き離されでもしたような冷んやりとした思いがあった。

この事件は、父の死から日が経っても、ある期間私の脳裡から消えなかった。私はこのことにこだわって、あれこれ考えて時間を過ごすことがあった。父は自分の死が近づいたことを知り、私に父親としての最後の親愛の情を示そうとして手を差しのべて来たのかも知れない。そして私の手を握った瞬間、ふいに自分のそうした気持の動きに厭悪を感じて、私の手を押し遣ってしまったのである。こういう解釈もできた。私にはこれが一番自然に思われた。若しそうでなかったら、父親は自分に応える私の手の出し方に何か氣にくわぬものを感じ、自分が示そうとした親愛の情を忽ちにして引込めて、私の手を離れたのかも知れぬ。そのいずれであるにしても、父親

が私の手をそれと感^{かん}じるか感^{かん}じられぬような微かな突き返し方に於て、急に近まった私との距離をふいにまたもとに戻してしまったということだけは確かであった。私はそうした父親を父親らしいとも思ひ、それはそれで父親らしくていいとも思つた。

併し、また一方で、私は自分の方で父親の手を突き離したのではないかという思いをも払拭することとはできなかった。手を離したのは父親の方であつたかも知れないと同様に、私の方であつたかも知れないのである。冷たいあたりの感^{かん}触は父親の全く知らないことで、一切私の負うべきものであるかも知れなかつた。そうでないと言ひ切る根拠はなかつた。この期になつて、今更甘えるのはあなたらしくない。子供の私などに、手など差しのべて来てはいけ^いない。そして私はいったん握つた父の手を、そつと父の方へ返してやつたかも知れないのだ。こうした解釈は、それに取^つり憑^{たづ}かれる度に私を苦しめた。

私は、だが、この父親との小さい事件をめぐつて、ああでもない、こうでもないと思ひを廻らす作業から、やがて解放されることができた。この解放は何の前触れもなしに、ふいに私のところへやつて来た。父親も亦、墓の中で、私と同じような思ひに驅られて、父親と私とのほか誰も知らない、それと判るか判らぬかのようなあの小さい取引きの意味を考えているかも知れないと思つた時、私は急に自分が自由になるのを感じた。私と同じように父も亦あの世で、あの小さいあたりについて、思ひを廻らしているかも知れないのだ。こうした想像の中で、私は初めて父親に生前に感じなかつたような子としての自分を感じた。自分は父の子であり、父は自分の父であ

ると思った。

父が亡くなってから、私は屢しばしば自分が父に似ているなという思いに捉とらわれることがあった。私は父の生存中、自分が父に似ていると思ったことはなかったし、周囲の者もまた私が父とはまるで違った性格を持っていると思い込んでいた。私は学生時代から意識して父と反対の考え方をし、反対の生き方をしようと自分に強いて来たが、そのことは別にしても、私と父とは似ているとは言えそうもなかった。父の厭いと人癖は若い時からのものであったが、私は常に多くの友達を持ち、学生時代には運動部の選手もしていて、いつも賑やかな輪のまん中に自分を置こうとすることがあった。そうした性向は大学を出て社会人になってからも続いており、隠棲生活へはいった父と同じ年齢になっても、父のように郷里へ引込んで誰とも交際しないで過ごすようなことは思いもよらないことであつた。私は四十代の半ばに達してから新聞社を退いて文筆家として新しく出発したのであるが、この時と余り隔へだたらぬ年齢において、父は社会との交りを断つてしまつたのである。

ところが、父が亡くなってから、私は何でもないふとした瞬間、自分の中に父がいることを感じるようになった。縁側から庭へ降り立とうとする時など、私は自分が父と同じ恰好で、足で庭下駄をさぐっていることを感じる。居間で新聞を拡げて、前屈みになってそれを覗く時なども同じである。煙草の箱を取り上げる時も、いったん取り上げた箱を、その仕種が父と同じであることに気付いて、思わずもとに戻すこともある。毎朝洗面所の鏡に對かつて、安全剃刀で顔を剃る

が、石鹼のついたブラシを水道の水で洗い、その穂の部分の水を指で絞る時など、これでは全く父親と同じことをやっているではないかと自分に言い聞かす。

こうした仕種や動作が父に似ているのはまあいいとして、父と同じ考え方にいま自分は落込んでいたのではないかという思いにぶつかかることもあった。私は仕事をしている時、何回か机から離れて縁側の籐椅子に腰を降ろし、仕事とは全く別のとりとめない思いの中に身を置くが、そうした時、いつも私はそこから見える櫟の老樹の枝を四方に張った姿に眼を当てている。父も亦同じであった。郷里の家の縁側で籐椅子にもたれていた父はやはりいつも樹木の梢に眼を当てていたのである。ふいに私は眼の前の淵でも見守るような思いに打たれる。父もいま自分が落ち込んでいたような思いに浸っていたのではないかと、そんな感慨を持つ。このようにして私は自分の中に父が居ることを感じ、そうしたことを感ずることに依って、父という一人の人間のことを考えることが多くなった。私は父と屢々対面し、父と頻繁に語るようになった。

私はまた、生きていた父が死から私をかばう一つの役割をしていてくれたことに、父の死後気が付いた。父が生きている時は、私は父でさえまだ生きているのだからといった気持ちで、勿論この気持は意識されたものではないが、恐らくそうした気持が心のどこかにあったことに依って、私は自分の死というものを考えたことはなかった。ところが、父に死なれてみると、死と自分との間がふいに風通しがよくなり、すっかり見通しがきいてきて、否応なしに死の海面の一部を望まないわけには行かなくなった。次は自分の番だという気持ちになって来た。これは父に死なれて初